

中西輝政著「本質を見抜く『考え方』」サンマーク出版 2007年11月30日刊を読む

1. 「自分」とは何か

- (1) 外国に留学した日本人の多くが、疎外感を感じる場面があります。
- (2) 外国のことは留学前から一生懸命勉強して、それなりの知識を身につけていったのに、行った先の外国人からは、日本の古典や伝統芸能などのことを聞かれ、答えられなかった自分にショックを受けるのです。
- (3) この経験は、じつは貴重なものです。おそらくこのような経験をした人は、日本人でありながら日本特有の文化や伝統を知らなかったことを恥じて、帰国してから一生懸命勉強しなおすでしょう。
- (4) 外国に行って日本的なものを見直す機会にめぐりあい、日本人としてのアイデンティティに目覚める人は決して少なくありません。私自身、『古事記』『日本書紀』など日本の神話や古典に没頭したのは、イギリス留学中でした。
- (5) 「グローバル社会」と耳にたこができるくらいいわれている国際社会の中でこそ、逆に「日本とは」「日本人とは」「自分とは」ということを、自分の頭の中、胸の中にしっかりと持っていないとやっていけないのです。
- (6) いろいろな場面で、自分はどんな人間であり、どんなことを大事に思い、これだけは絶対に譲れないものとして何を持っているのかが問われます。それを外に対してしっかりと発信することで、「自分自身の座標軸」を定めることができ、行動に移すこともできるのです。
- (7) 私は、国際政治学、国際関係史、文明史を専攻分野として研究してきましたが、いつもそのことを基本に置きながらものごとを見てきました。
- (8) まず文明史の視点で、日本は、どんな国かという日本のあり方についての自画像を描き、自己認識を明確にします。その上で、国際社会において日本はどうしたらいいのかという議論をしていきます。「日本は何か」ということがわからなければ、国際社会での問題を考えることはできないのです。
- (9) いま日本が早急に対処を迫られている国際問題に、北朝鮮にかかわる「6カ国協議」があります。そのとき、自画像が明確でないと、どうしていったらいいのかははっきりせず、結局「国際

協調でみんなに合わせていこう」とか、「みんなと歩調を合わせることが穏便な道だ」という結論に達してしまいます。

(10) そうなると、国際協調の名の下に、「日本だけが反対するのはよくない」「みんなに合わせてないと日本は孤立する」などの論調が幅を利かせることになります。しかし、このときこそ「日本とは何か」をわきまえた行動をとらないと、協調すればするほど、結果として日本を孤立させることになりかねないのです。

(11) 「自分とは何か」を知ろうとすると、その姿を見るための「鏡」が必要です。その鏡が歪んでいたら、そこに映る自画像も歪んでしまいます。ですから、自分を正しく知るには、まず歪んでいない鏡を手に入れることです。

(12) 自虐的にしか自分を見られない多くの日本人の姿を見ると、自分を映す鏡が歪んでいるのではないかと思うことがあります。自分を映す鏡とは、つまり「歴史観」です。歪んだ歴史観には、歪んだ自画像しか映りません。

(13) 歪まない鏡で日本という国や、自分自身を見ていただきたいと思います。すべてのものの見方・考え方は、「正しい自画像」を出発点にして始まるのです。

P19 ~ 21

2. 「日本人」を明確に意識する

(1) 「自分はいったい何者であるのか」を知り、自分の自画像をはっきり持てば持つほど、ものごとに対して、効率的に対処できるようになります。日本という国にしっかり足場を持っていることによって、物心両面での安定感ももたらされます。

(2) とくに「精神の安定」は重要で、自分が何者であるかというアイデンティティが精神を支える根幹の部分をつづくります。もちろん、それにとらわれすぎてはいけませんが、けっして甘く見てはいけないものです。

(3) アイデンティティという考え方は、どういう姿勢や気持ちで使われるかによって、持っている意味合いに雲泥の差が出ます。たとえば、日本人ということであれば、後ろ向きの心で考えるときは、「どうせそういう国民性だから」と、都合のいい言い訳にもなってしまいます。いまさら変えることなどできないのだから「しょうがない」と、後ろ向きでとらえるか、それを誇りや安心感としてとらえ、自分の「パワーの源」にするかは、結局、自分の心のあり方次第です。

(4) 「考え方」と「心のあり方」というものは、ほとんど一つのものである。といってもいいと思います。

- (5)日本人の美点、つまり日本の強みは、明らかに日本人の「心のあり方」です。じつはこれこそ、西欧はもちろんのこと、中国や東南アジアの国々に対しても、その安定した精神性で圧倒的に優位に立っているもので、とても重要です。
- (6)「騙すより騙されろ」、こんな処世訓を親が子どもに教える国は、世界中どこへ行っても見ることはできません。外国人にはとても考えられないことで、騙されるくらいなら先に騙したほうがいいというのが、多くの国々の考え方です。
- (7)日本特有の神道の考え方の基本に、「^{あかい}明・^{きよい}浄・^{ただしい}正・^{なおい}直」があります。「赤き、清き、正しき、直き心」です。とくに直き心(素直な心)というのが絶対の価値を持っています。「三種の神器」の「鏡・剣・玉」は、日本の大切な「三つの心」を表し、古来、日本人が一番大事にしてきたものです。それはつまり、「素直さ、勇気、慈しみ」の三拍子そろって初めて人間といえる、というわれわれのアイデンティティです。それをつねにめざす民族だからと、胸を張って誇りに思っているのではないのでしょうか。
- (8)日本のそういうアイデンティティを持った企業は、どこに本社を置いても、どんなにグローバルな展開をしても、もちろん外国人をトップに据えていても、それはまぎれもなく「日本の企業」なのです。
- (9)トインビーやハンチントンが紹介しているように、日本は独自の「日本文明」を持つ、一つの独立した文明圏なのです。
- (10)日本を訪れた外国人が異口同音に驚く日本人の国民性。それは外国人よりもまず私たち自身が、しっかり認識しなければいけないものです。
- (11)自分の根っこの部分にあるアイデンティティをしっかりと認識し、誇りを取り戻し、その上で、いろいろな国の国民性に興味を持ち、お互いに尊重していくことが大切です。
- (12)そういう基盤の上に立ってものごとと、この世界を考えていくことが、ブレない「考え方の座標軸」を身につけ、ものごとの本質を見抜く考え方を養ううえで一番大切なことだと思います。

P218 ~ 220

[コメント]

中学生や高校生が日本の古典の基礎を学び、その基礎学習に基づいて一生をかけて自らの力で古典を読み解き、自らのものにする理由がこの2つの文章を読むとよく理解できる。イギリスの大学でインテリジェンスを学び身につけ、京都大学教授として御活躍の中西先生の御著書には、学ぶべき内容がぎっしりとつまっている。

- 2010年7月1日 林明夫記 -